

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 国立大学法人福井大学大学院福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科
	事業名：【NITS・福井大学連合教職大学院コラボ研修】 「遊び」のワークショップを通して実践の土台にある「直観的判断力」を磨く協働探究型研修
	研修等名：【NITS・福井大学連合教職大学院コラボ研修】 「遊び」のワークショップを通して実践の土台にある「直観的判断力」を磨く協働探究型研修
	開催日時：令和6年8月2日 13時～16時30分 開催場所：奈良女子大学附属幼稚園（奈良県奈良市学園北1-16-14） 参加人数（総数）と参加者の属性：（79人）幼児教育実践者（幼・保・こ）38人、小・中・高・特別支援学校教員13人、大学教員8人、行政職員4人、学生6人、保護者・一般10人

目的：

「研修観の転換」のためには、「探究的な学び」を実現する教員研修が求められている。この課題を解決するために、連合教職大学院では、連携校である奈良女子大学附属幼稚園を活用し幼児教育の知見に基づいた、学校種や立場を超えた協働探究型研修を開発してきた。本申請事業では、モノ、人、空間、時間の環境に自らが行為主体として働きかけ、情動を伴う即興的な判断の連続によって継続し展開する「遊び」のもつ力を切り口に、「探究的な学び」を実現することに挑んだ。

幼児教育における「遊び」は、各自が自発的かつ主体的に環境に関わることから始まる。「遊び」の中で自らの問いを立ち上げ、その問いのもと環境に関わり続けることで、新たな視点や発見が創発され、「遊び」は深化していく。「遊び」の質を決めたり、方向づけたりするのが、「遊び」が展開する瞬間を直感的に捉える力である。この「遊び」における「直観的判断力」を「探究的な学び」の実現に援用したのが本研修である。

本研修は、各自が有している漠然とした直感を経験に裏付けられた「直観的判断力」へと磨き上げることによって、各自の教育実践の質的向上を図ることを目的とした。

内容：

本研修の目的を実現するために、奈良女子大学附属幼稚園を活用して「遊び」のワークショップを行った。「遊び」の展開過程を振り返ることで直観的判断の存在に目を向け、そこにある要素の言語化を、探究的対話を通じて促し、自らの「直観的判断力」を再構成していこうとした。具体的にはアイスブレイクと3つのSession（「遊び」のワークショップと2つの省察と対話）で研修会を構成した。

アイスブレイクでは、西野巧泰氏（札幌市教育委員会学校教育推進課・指導主事）がモデレーターを務めた。自分の気持ちの向くままに行動することが直観的判断を引き出すとし、直観的判断が他者を巻き込み、価値を生み出してきた自身の実践を紹介した。その後、簡単なワークを行うことで、参加者の直観的判断を引き出し、行為主体者として「遊び」に向かう心構えを作っていった。

Session1は「遊び」のワークショップである。予め構成していたグループの構成員が同室になるよう、参加者に遊びの場となる保育室を知らせた。参加者は指定された保育室で、様々な形状の白い紙や初対面の人に囲まれた環境にまず身を置いた。自らが感じ考えたことを大切にして行動するよう伝え、参加者は戸惑いながらも、教材や他者に関わりながら「遊び」を展開していった。

Session2では、同室で遊びを展開していた6～7人で、「遊び」の展開をめぐる省察と対話を行ない、「直感」と自身の行為の意味を捉えることで、自らの「直観的判断力」を掴んでいくことを目指した。印象に残っている「遊び」の場面を紹介し合い、①「直感」によって引き出された行為、②なぜその行為をしたのか、③「直感」によって、しないという選択をした場合それはなぜかの3点について省察と対話を行った。近藤直子氏（私立春日保育園・副園長：静岡市）他11名のファシリテーターを各グループに配置することで対話が円滑に進む雰囲気を作り出していった。「遊び」の中で互いに感じていたことを知ることで、自身の瞬間的な判断の意味に目を向けていくことになった。対話後に各保育室の遊びの痕跡を見て回った。同じ教材でも保育室ごとの全く異なる遊びを目にすることで、自身の「遊び」の中における判断の依拠を捉え、自らの「直観的判断力」を掴み取る契機となった。

Session3は「直観的判断力」をめぐる探究的対話である。新たなグループで「遊び」の様子とこれまでの対話の内容について紹介し合った。各自が学びとったことを出し合い、その意味について捉え直すことによって、自らの「直観的判断力」について理解を深めていった。

後日、事後アンケートを実施し、その結果を参加者と共有した。

成果：

Google フォームを用いて事後アンケートを実施し、量的・質的評価を行った。

量的な評価として、「大変よかった」が 83%、「よかった」が 17%となり、高い評価が得られた（回答率 80.8%）。質的な評価としては、本研修で学び取ったことや、「直観的判断力」についての自らの捉えを記述してもらった。以下、記述を抜粋したものである。「直感的にしたいことをしているのが遊びではあるが、ただしてみる時間と遊び込んでいると感じる時間があり自分の向き合い方が全く異なることを感じた」「自分の行為が何によって引き出されているのかを考えた。直観的判断力はその時、その相手、その場で自分なりのベストを探る判断だったように思う」「自分の中で何が判断の基準となっているのか、見つめ直す機会となった」「普段、学校生活では常にゴールや落とし所を考えながら、タスクとして仕事をしており、生徒や教師集団の直観的判断力というものに頼っていないことを思った。他者の存在を根拠にした判断に依拠しながら仕事をしていると思った。根源的な問いを突きつけられる」などであった。

これらの結果を踏まえ、教員研修の成果として考えられるのは以下の 3 点である。

- (1) 「遊び」は直感的行為の連続によって展開されていく。「遊び」の質的な変化を捉える体験が自らの「直観的判断力」を掴み取る契機となった。
- (2) 「遊び」は、環境との関係性が生まれることによって展開していく。「遊び」によって自らが行動するうちに思考が働き次々と行為が引き出されていく経験を促すことになった。「遊び」の展開過程を振り返ることは、無自覚のうちに引き出された自身の行為の意味に目を向けることにつながった。
- (3) 「遊び」は身体性を伴う。このことが、自らの経験との重なりを想起させ、参加者の実践的課題に即した学びを創り出すことにつながった。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

研修は、設計者と参加者がともに学びを創り上げる場であることを以下の 2 点から実感した。

第一に、研修内容の展開は参加者の学びの状況に応じて柔軟に変更する必要があったことだ。事後アンケートで、「遊び」から想起された自身の経験や実践の意味を吟味する記述が多数見られた。研修時に、参加者の対話の様子から、「遊び」の展開過程を捉え直していこうとしている状況を担当者も掴んでいたものの、計画通りに研修を展開した。事後アンケートの記述から、研修での「遊び」の体験を意味づける時間をさらに保障することで、参加者の実践的課題に即した学びをより深めることになったのではないかと考えられた。

第二に、運営を担う中核メンバーが設計段階から参画したことによって、「探究的な学び」の実現を後押しすることにつながると考えられたことだ。担当者及び中核メンバーは幼児教育の実践者が務めた。環境を構成したり、対話を進めたりする際には、それぞれの「遊び」に対する価値観が反映される。研修を設計していく過程が、「遊ぶ」ことをいかに捉えているのかを自覚する機会となった。運営を担いながら研修参加者となることによって、「遊び」における自らの「直観的判断力」への理解をより深めることができると考えられた。

アイデアや工夫したこと：

- (1) 会場の座席を各自で選択したり、保育室で一緒に遊ぶメンバーは事前に組み合わせや属性が分からないようにしたりすることで、様々な場面で参加者の直観的判断による行動を引き出す機会を設けた。
- (2) 各保育室の物的環境を同一にし、「遊び」の展開過程の差異が「遊び」の痕跡から見出せるようにした。「遊び」の痕跡を見る時間を設けることによって、未分化な状態にある瞬時の判断の依拠を掴んでいこうと試みた。
- (3) 様々な「遊び」の創出過程が引き出されるように、各グループの構成員の属性を多様にした。また幼児教育実践者の参加者が、人的環境となることを意図し、各グループに幼児教育実践者を複数名加えた。



「遊び」のワークショップ

対話と省察

「遊び」の痕跡